

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	選后感 : 選後評
Author(s)	上田, 英夫
Citation	龍南, 229: 110-111
Issue date	1934-11-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7231
Right	

ゐたり、説明してゐたりするからです。小説は説明ぢやい
けない。描かなくては。

重大なる家出——相當なテーマを捉へてゐるが、それを
消化してから書かないから冗な描寫ばかり多くてつまらな
くしてしまふ。引緊めて書き直して見るとよいと思ひま
す。二つの事件を取扱ひながら、そして自分の關係の事件
が表面に、重大なる家出の主人公が裏面に居るのも可笑し
いですね。

水——早魘で困つて居る田舎のありさまを克明に書いた
ものです。作者の頭を透して書かないで定焦點の寫眞のや
うに遠景も近景も同じ明瞭さであるのは、もしそれに徹底
すればそれで味があるでせうが、この作品には混然として
居るのがいけないと思ひます。最初の父からの手紙や、歸
省の道中の描寫は不必要でせう。どうしても書きたいな
ら、歸省時主人公に語らせてもよいでせう。

お嬢さん——プチブルの令嬢の家出までの心理經過を描
いたもの。作者はなかなか手の込んだ作爲や伏線を用ひて
居て苦心のあとが見える。長篇のものであつたから簡単に
して置きませう。さよなら。

選 後 感

教授 上田 英 夫

詩と歌と句とを拜見した。まづ詩から。

「奇運」——いくらか概念的だが一寸面白いと思つた。
最後の二行で纏まつてゐる。

「世の人は知る由もなし」——歌はれてゐる美しき樂園
のやうに、この詩も生きてゐない。概念的。尤も作者の意
圖はわかるが。

「恒さん」——これも面白いが、少しだらだらしてゐ
る。も一つひきしめる必要がある。これでは詩が怪しい。
だが、この作者は慥かにいいところを持つてはゐる。

「秋の道」——散文詩だが少し調子が低い。もう少し弾
まなくては。

「病床」——少々たごたいひ過ぎてあるので作者の心
象がはつきりして來ない憾みがある。

「秋の散策」——少しひきしまり方が弱い憾みはある
が、氣持のよい一篇だ。

「輪囷り」——感情が十分に滲み出てゐない。

「月の暈」——ほのかな軟味を包んだ小曲。但し今少しピンと来る所があつてほしい。

「時雨」——今少し感覺性と潤ひとが欲しかつた。

○
短歌にうつる。

「いらだてる」——まだ歌といふものが分つてゐない。氣まぐれで詠んであるやうな氣がする。調子の軽いのも贊成出来ない。

「秋の野」——あまい。幼稚だ。勿論特殊性など求められようもなく。

「今日も亦」——今度の應募作品中、まあ普通の出来榮。少し感情がかたい。

「雑詠」——やはり獨りよがりの域を脱しない。

「朝やけ」——一體にあまいやうに思ふ。併し「秋去りし友よ」の方はまづ採れる。

○
今度は俳句。

短歌の方が大体あまくつて鼻もちならぬ代物の多かつた

のに比べて俳句の方には幼稚ながらも又陳腐ながらも擱んだものが多かつた。これは、勿論和歌と俳句との本質的な相違から來てもゐようが、高校生のやうに、どちらかといへば理智的傾向の強い人々にはあるひは俳句の方が眞似やすいのではあるまいか。さて、

「北國風景」——題材の關係もあるが、今度の應募句中比較的一等新し味があるやうに思つた。新し味といへば、だれもかれも「何とかや……」「何とかかな」とやらなければ俳句でないかのやうに考へて居られるらしいのは困つたものだ。

「蟬時雨」——どうも創意が乏しい。

「雑婆——ほのく」と——この人が一番揃つてゐたそして、割に生きた句がある。

「閑日雑吟」——可もなし不可もなし。

「雑吟——おそ躑躅」——この人は少し堅苦しい。もつと自然ならぬ氣持でやつて御覽なさい。

